
東方宵闇亭

CROW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方宵闇亭

【Nコード】

N4722BA

【作者名】

CROW

【あらすじ】

高校受験の会場へ行く途中にトラックに撥ねられ死んだごく普通の中学3年生の樹紫苑^{いつきしおん}は謎の青年仁によって東方の世界へ転生させられた。

第1話

俺は樹紫苑^{いつきしおん}15歳、ごく普通の中学3年生で高校受験の会場に行く途中だった。

男「君！危ない！」

「えっ」

よく見るとトラックが歩道に乗り上げ俺の目の前に来た。そしてあっさりと撥ね飛ばされ地面に叩き付けられた。体中が痛かった。トラックは電柱柱に激突した。

女性「キャアアア」

近くでその光景を見ていた女性は俺を見て甲高い悲鳴を上げた。

男「救急車と警察を呼ばないと」

俺に声を掛けた男性が急いで携帯電話を取り出した。

「（ここで終わるのか）」

だんだん近くに居た男性の姿がぼやけて来て痛みも和らぎ始めた。そして意識を失った。

「此処は？」

目を覚ました場所は病室ではなく真っ白で何も無い広い空間だった。

？「おめでとう、君は幸運だ」

突然背後から声がした。

「は、いつの間に」

声のする方に振り替えると、白いスーツを着た金髪で青い目の美青年が居た。

？「始めまして僕は仁^{じん}」

彼は仁というらしい。

「で、此処は？何が幸運なんだ」

意味不明な状況に俺は困惑した。

仁「君は死んだんだよ、そして抽選で選ばれた」

「あのまま死んだのか」

仁「でも君はやり直せる、しかし別の世界だけだね」

「どこだ」

仁「喜べ、君がよく知っている「東方の世界」さ種族は上級妖怪だ

そして能力もある」

「何の能力だ」

仁「秘密さじきに分かるよ、じゃあ行つてらっしゃい」

「ちょっとまだ聞きたいことg」

そして意識を失った。

目を覚ますと明るい森の中で日本刀を持った一人の若い男性がいた。

男「貴様妖怪だな、死んでもらう」

そしていきなり俺の左胸を刺した。え、また死ぬの？

「あれ、血が出ない」

代わりに傷口から黒い霧みたいな物が出た。

「（何だ？「闇を操る程度の能力」「持っている能力を使いこなす程度の能力」一つ目はルーミアと一緒にだな）」

男「何だ真っ暗だ」

「オヤスミ」

男「かはっ」

俺は後頭部を右の拳で殴り気絶させた。

「えっと此処は何処だ」

そして山があつたので登って行つた。

？「あやや、貴方は何者ですか」

上から声がしたので上を見ると背中に黒い羽根を生やした少女が浮いていた。彼女はどう見ても射命丸文だった。此処は妖怪の山か。

「誰だ（名前呼んだら不味いな）」

文「貴方は妖怪ですか（妖気が私より多い）」

彼女は俺の前に降りて来た。ヤバい本物だ。

「そうだけど君は天狗か」

文「はい、私は射命丸文と言います貴方は」

「俺は樹紫苑」

文「では、またいつか会いましょうか」

そして彼女は羽を開いて飛んで行つた。

「別の場所に行こうか」

そして山を下りて数時間森の中をさまよっていた。

「空気が美味しい」

？「ねえ、食べていい？」

後ろから声がした。そしてあたりが急に薄暗くなった。

「？」

振り返ると黒い服を着た金髪の背が俺（170cm）の首元ぐらいの少女が

両手を広げ首を右に傾け笑っていた。ルーミアか？でもリボンが付いてない。

ル「答えないなら食べていいんだね」

よく見ると彼女は傷だらけだった。

「おい、その傷は大丈夫か」

ル「え、これは……」

彼女はうつむき話し始めた。俺を食うんじゃないのか。よかった聞き分けが良くて。

彼女は比較的弱く、自分より強い妖怪に虐められたらしい。

「じゃあ、強くなりたいか？俺も同じ能力だ」

彼女は俺と同じ能力なので鍛えてあげようと思った。

ル「うん、私強くなりたい！私はルーミア」

「俺は樹紫苑」

そして俺は彼女を強くすることになった。

第2話

早速、修業を始めた。

「まずはこうやって」

俺は刃物状にした右手を見せた。

ル「うーんと難しいな」

彼女は右手を霧状にした。

ル「あ、出来たよ」

そして上手く出来た。才能があつてよかった。無かつたら大変だったな。

「次はこうだ」

俺は右ての5本の指を針上にして伸ばし近くにいた猪を串刺しにした。

ル「えっとうっ」

指ではなく前腕が5本の尖った触手状に分かれて俺が仕留めた猪に刺した。

「指じゃないけど、まあいいか」

ル「お腹すいてたの忘れてた」

「こいつを食えば？」

ル「いいの、紫苑が仕留めたのに」

「別にいいよ、腹空いてないし」

そして彼女は手を刃物状にし皮を剥ぎ細かく切って口に運んだ。結構グロいな。ああ、内臓が・・・

ル「美味しい」

少女食事中・・・

そして10分足らずで猪は骨と皮だけになった。彼女の服と口元は血まみれだった。

「おい、汚れてる」

ル「こっやつたら大丈夫、服は体の一部だから」

血が全てしみ込んで行った。

「じゃあ、次は明日だな」

ル「じゃあ、寝よ」

そしてそこで野宿した。彼女は俺の右側で寝た。

翌朝起きると右手の指が噛みちぎられていて無かった。ルーミアのほうをみると千切れた俺の指を啜えて寝ていた。

寝相悪いな、下手したら食べられそうだな。

ル「ムシヤリ」

彼女は起きると俺の指を口の中に入れた。そして咀嚼して飲み込んだ。

ル「昨日のより美味しい、あれ能力が増えた？」

まさか俺の指を食ったから俺の能力が彼女の物になったのか？じゃあ修業はスムーズに行きそうだな。ラッキーだな

数分後、修行を始めた

「じゃあ、今度はこうやって体を広げる」

俺は霧状になった。

ル「暗くて何も見えない」

「じゃあ次はルーミアの番だ」

体を元に戻して、彼女に言った。

ル「こうかな」

彼女は霧状になり、真っ暗になった。

「成功だ、戻っていいよ」

ル「次は何」

「こうだ」

俺は闇を集めてハルバートを作った。

「何でもいいから武器を作ってみろ」

ル「こんな感じ？」

彼女が作ったのはスーパーロボット大戦OGのダイゼンガーの斬艦刀そっくりな形状で刀身が黒い大剣だった。

「凄いなこれ」

ル「私の能力ってこんなに使えたんだ」

彼女は嬉しかったらしく笑顔になった。

そして数十年後さらに彼女は俺と戦えるくらい強くなり、体の形を変えられるようになって、大人の体になっていて髪は小さい時のま

まのセミロングだった。今は空き家に住んでいて、部屋が多く囲炉裏もあった。

ル「ねえ」

「何だ（目のやり場に困るな）」

彼女はかなりの美女になっていた。特に肌の色が雪のように白く綺麗で胸はDくらいだった。

ル「えっと、私その・・・」

彼女の頬は赤かった、まさか告白なわけないから熱かな？

「どうした、熱でもあるのか？」

ル「いや、何でもないわ（まさか重度の鈍感？それとも自分を卑下し過ぎなのかしら？）」

「無理するなよ（一体何なんだ）」

その時、いきなり目の前の空間が裂けた。裂け目からは目や手が蠢いていた。これは紫のスキマか？

そして金髪の長髪の紫の洋服を着た女性が上半身を乗り出して来た。この時もドアノブカバーみたいな帽子被ってたのか。

？「八雲紫と申します」

「それで八雲さん何しに来た」

紫「月との戦争へ行つて」

「え？」

ル「何者よ貴方？あ！」

そして俺達の足下の床にスキマが開き俺とルーミアは落ちて行つた。

紫「2名様ご案内」

落ちる時に彼女が確かにそう言った。

第3話

出て来た場所は暗くて後ろからは地球が見えていた。そしてビームが飛んで来た。月に来たのか俺、凄いな。

妖怪「何だこいつらうわあああ」

近くで誰かの断末魔が聞えた。

「紫の奴何を」

多分、今幻想郷を作ってそれに異議を唱える奴らを一気に抹殺する気だろうと俺は推測した。

？「見つけたぞ穢れ共！」

右の方から女性の声がした。そこを見ると薄紫の長髪を黄色いリボンで結んでポニーテールにしている少女が刀を突き付けていた。

「（綿月依姫だつてえ！厄介な奴が来た）」

彼女は八百万の神を体に宿らせることが出来たので、勝てるかどうか不安だった。

「ヤバい、ルーミア逃げるぞ」

俺は彼女の手を取り猛スピードで逃げた。

依「あ、待ちなさい（チツまた来た）」

追いかけてようとしたが妖怪の集団が来たので諦めざるを得なかった。

その頃の紫は遠くで戦いを見ていた。

紫「月の技術つて恐ろしいわ約1000名の妖怪達が3時間足らずで6割も死ぬなんて」

頬に冷や汗が流れた。

月人「見つけたぞ」

5人の月の兵士たちが一斉にビームガンを打ちだした。

紫「！？（しまった、間に合わない）」

その時ビームが黒い霧にかき消された。

「大丈夫か」

ル「（フラグ立てそうね、あれ？フラグって何？）」

俺は月人に狙われていた紫を見つけ助けた。

紫「生きてる？」

月「また穢れかぐはっ」

「黙って聞いてたら穢れ、穢れうるさいなあじゃあ人が穢れたった

ら人の形して生きるの止めるよ」

俺は兵士達の胸を伸びた指で貫き殺した。そして生まれて初めて人を殺した。

「あまり、殺すのはいい気分じゃないな」

妖怪「八雲！もう俺ンところは全滅だ」

一人の若い男が紫の所へ来てそう言った。

紫「もう、退却よ皆！退却よ！」

彼女は拡声器を出して妖怪達にそう告げた。河童製だろうか？

そして生き残った妖怪達が彼女が作ったスキマに入って行った。

妖怪「惨敗だな」

妖怪2「月って怖いな」

入る時にそんな会話が聞えた。

紫「貴方、私の式にならない？」

地球に戻った後彼女はそう言った。まだ藍居ないのか？

「はい？」

ル「させないわよ」

ルーミアが彼女を睨んだ。

紫「まあ、ゆっくり考えておくことね（この女邪魔ね、どうにかしないと）」

そして彼女はスキマに入って消えた。ヤバいな面倒な奴に目つけられた。ルーミアに何かあったらどうしようか。

第4話

その夜寝室

ル「じゃあおやすみ」

俺と彼女は同じ部屋で別々の布団で寝ていた。

「（可愛い寝顔だな）」

次の日、ルーミアが寝室に居なかった。

「ルーミア何処だ」

全部の部屋を探したが、彼女は居なかった。靴も無い。

「一人で生きて行くのか」

「出て行く」ぐらい言ってくれよ。

しかし彼は大きな勘違いをしていた。彼女は紫に連れ攫われたのだ
った。

？

彼女は地面に倒れていた。

ル「あれ？此処は（力が使えない）」

紫「起きたわね」

ル「貴方、何をしたの」

彼女は目の前に立っている紫を睨んだ。

紫「じゃあ、来なさい」

そしてスキマに落とされた。

地底 無法地帯

ル「ここは」

すぐに紫が出て来た。

紫「地底よ」

近くに10人の鬼が居た。

鬼「それで修行のお礼は」

紫「この娘を1日貸すわ、何をしてもいいわよ（邪魔ものも消え
し修行付けてくれたお礼もできるなんて一石二鳥ね）」

ル「ちょっと何」

彼女は鬼に囲まれた。

鬼「俺らといいことしようか」

ル「や、離して（彼じゃないと嫌あ）」

そして彼女は彼らに犯された。

1日後、彼女はぐったりとしていた。服は胸元が大きく開いていて、目は虚ろだった。

紫「取りに来たわよ」

紫が再び来た。

鬼「ここにいる」

紫「じゃあね」

紫は彼女をスキマに落とした。

2時間後

？

八雲邸・庭

紫「これで封印は終りね」

紫は彼女の紙に赤い御札を結び付け、その周りに丈夫な結界を張って解けなくした。

彼女の体は黒い靄に覆われた、靄が消えると彼女の体は、紫苑と出会った時の体に戻った。

ル「此処は何処？」

紫「（後は適当な場所に）」

紫は彼女をスキマで何処かの森へ送った。

第5話

紫は紫苑の家を訪れた。

紫「誰もいない」

彼はもうすでに何処かへ行ってしまったのだった。

紫「何処行つたの」

その頃の紫苑

俺は荒野を全力疾走していた。理由は陰陽師に見つかったからである。

「やっと逃げれた」

何とか振り切った俺は歩き始めた。しばらく歩くと白い長髪で赤いもんぺみたいなサスペンダー式のズボンを履いた少女を見つけた。

？「誰だ妖怪か」

どう見ても彼女は藤原妹紅だった。彼女は俺を見るなり焰の塊を飛ばしてきた。

「ちょっと俺は何もしない」

妹「貴様、この先の村を襲う気か」

何か勘違いされているようだった。

？「妹紅！」

青い服で青っぽい白の長髪の女性が来た。そして彼女に頭突きをした。彼女は上白沢慧音だった。

まさか、2人の原作キャラに会えるなんてな。

慧「留守番すっぱかして何してる」

「じゃあ、さよならー」

俺はその間に走って逃げた。

慧「帰るぞ」

慧音は彼女を引きずって行った。

数時間後、ある村を見つけた。村人達からは妖力が感じられた。今夜は此処で泊めてもらうか。

「あのお旅の者ですが」

俺は村の門の前に居る、多分村の門番だと思う2人の槍を持った男性にそう言って歩み寄った。

門「人間じゃないな入れ、木村、こいつを村長の家へ案内しろ」

一人の門番が木村と呼ばれた青年にそう言った。

木「どうぞこちらへ」

村は広い農地があつて、家がバラバラに建っていた。そして奥に大きな門が見えた。

門「何の用だ」

門番が2人立っていた、さっきと同じようにそれぞれ槍を持っていた。

木「村長に会いたいのですが」

門「君か、入れ」

意外とあっさりと入れてくれた。

門「村長！客です」

入口の前に小さい庭があつてそこには石で囲った小さな池と大きな松の木があつた。

村長「誰だ」

村長は戸を開き出て来た、見た目は若い男性だった。

「旅をしている樹紫苑です、今日泊る場所を探しています」

俺は彼に用件を伝えた。

村「じゃあ家の離れを貸す、君は帰ってくれ」

そして木村が帰って行った。

村「じゃあ、あそこにあるから」

そして彼は指を指した、そこには藁ぶき屋根の小屋があった。

村「じゃあ、私は此处で」

彼は中に入って行った。

離れは狭く、俺が寝たら一杯になるほどだった。

「布団だ」

黒い木の床で畳んだ布団があった。

「よし、寝るか」

そして布団を敷いて中に入り寝た。

「？（騒がしいな）」

早朝に物音で目を覚ました。

「燃えてる」

外に出ると村が火の海だった。

「俺を追っていた陰陽師」

昨日俺が出あった陰陽師で5人いて、刀を持った人が8人いた。

「？」

その中1人が村長の首を持っていた。

陰「下種如きが、人のまねをして暮らしてたとはな」

陰2「殆ど逃げられたな」

男「あそこに誰かいるぞ」

「（；^ ^）（しまった）」

俺は彼らに見つかった。

「人を食べてみるか」

俺は黒い霧になって、彼らを覆い尽くした。

陰「何だ、真っ暗で何もみえない」

「じゃあ、頂きます」

そして一気に押しつぶし、吸収した。そう言えば味が分からないな、どうせ美味しくなさそうだけど。

「ふう」

生きている者は誰も居なかった。生き残って逃げた奴もいるだろう。俺は彼らを全員埋めてから村を出た。

「今度は何処に行こうかな」

そして俺は猛スピードで走って行った。妖怪っていいな、持久力が凄い！

第6話

しばらく歩くと向日葵が大量に咲いている花畑があった。

「（此処は、まさか）」

俺は風見幽香の花畑と確信した。

？「ちよつと何よこれ、駄目そこは」

近くから声がした。声のする方へ進むと、緑の髪で赤いチェック柄の服を着た女性が鳶に縛られていた。

「え？（やっぱり幽香だね）」

幽「ちよつとそのあんた！」

彼女が俺を見て叫んだ。

「助けたらいいんだろ」

俺は鳶を闇で作った大量の手でちぎり取った。

幽「はあ」

彼女は地面に降りた。

「で、どうしてこんなことに」

幽「それより、私と勝負してくれるかしら」

「（妖気は俺と同じぐらいか）」

そう考えていると拳が飛んで来た。そして俺の腹に直撃した。

幽「何これ、抜けない」

俺は闇を出し、彼女の右手を固定した。そして体を霧のようにした。

幽「こうなったら、こうね」

彼女は妖気を全身から放出した、俺は吹き飛ばされ、元の人型に戻った。

「予想外だったな」

幽「喰らいなさい」

彼女が付きだした右手に妖力を集め出したその時

テレーッテー テレーッテー

「あれ、携帯が鳴った」

携帯を開き電話に出た。

仁「ああ僕だよ」

「何だ」

相手は仁だった。

仁「実は君は力を封印されてるんだ」

彼がそう言った。

「は？」

仁「今、その封印を解いた」

幽「消し飛べ」

それと同時に彼女の右手の掌から極太のビームが出た。

「（妖気が漲って来た）」

俺は闇で打ち消した、そして彼女をグルグル巻きにした。

幽「降参よ」

「じゃあ、俺は帰るよ」

俺は猛スピードで走って逃げた。

幽「また来てもいいわよ、今度はお茶でも飲みながらね」

走り出す前に彼女の声が聞えた。俺は彼女に気に入られたのか。

その後、一人の男の妖怪が声を掛けて来た。

男「貴様が闇の大妖怪の紫苑か」

「何の用？」

男「俺とやらないか」

彼は着物を着ていたそして、帯を外そうとした。ホモかこいつ、よく見ると彼に似てるな前世かな？

「きゃあああああ」

男「アツーーーーー」

俺は甲高い悲鳴を上げながら彼の右腕を掴み放り投げた。危つく掘られる所だった。

「やってみるか」

俺は体を闇にした、そしてハリー・ポッターの死喰い人みたいな感じに飛んだ。体は彗星のように尾を引いた。

「すげえ」

そして物凄いスピードで飛んだ。

「このあたりでいいか」

俺は体を元に戻し近くの林に着地した。

「やるか」

俺は木の影に溶け込んだ。そして隣の木の影に移動した。

「これだったら闇を媒体に移動できるな」

そして日が沈んだ、今日は新月で真っ暗だった。

「全部暗いという事は・・・」

俺は再び体を闇にして夜の闇に同化した。これで月が無い時は何処でも自由に行ける。

「全てが見える、感じる」

その時何処かから悲鳴がした。

「？行ってみようか」

俺はその場所に行った。そこは妖怪に襲われている村だった。

？「許さない、絶対に」

そして近くにいた俺と同じぐらいの背の少年が喋った。

？「覚悟しろ妖怪！」

そして俺を見て槍を突き刺した。

「……………（帰るか）」

俺は再び闇に溶け込んだ。そして朝までその状態で寝た。

その後さっきの少年は妖怪退治を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4722ba/>

東方宵闇亭

2012年1月14日17時52分発行